

平成20～22年度組織的な大学院教育改革推進プログラム

研究と実務を架橋するフィールドスクール 社会に貢献するアジア・アフリカ地域専門家の養成コース

平成20～22年度実施報告書小冊子

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



もくじ

4 はじめに

5 フィールドスクール

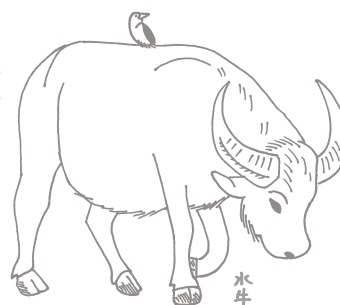
- 6 ベトナム・フィールドスクール
- 10 エチオピア・フィールドスクール
- 14 ネパール・フィールドスクール
- 18 インドネシア・フィールドスクール
- 22 カメルーン・フィールドスクール
- 26 タイ・フィールドスクール
- 30 ナミビア・フィールドスクール
- 34 フィールドスクール・コラム



アオザイの少女



バナナ



水牛

35 研究発信トレーニング

- 36 参加者・研究タイトル
- 38 記念品と告知ポスター



ガルーダ



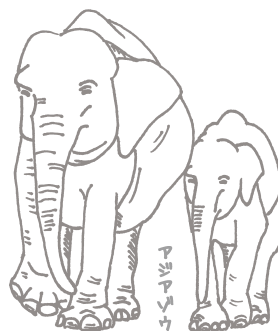
ラフィアヤシ

39 院生発案共同研究

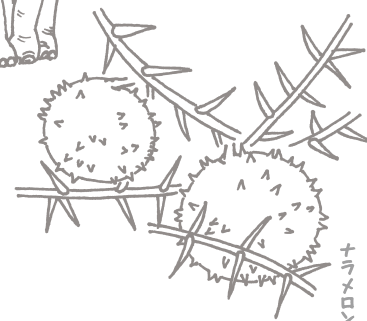
- 40 共同研究タイトル一覧

43 その他の活動

- 44 その他の活動一覧
- 46 フィールドスクール参加者一覧
- 49 共同研究報告書一覧



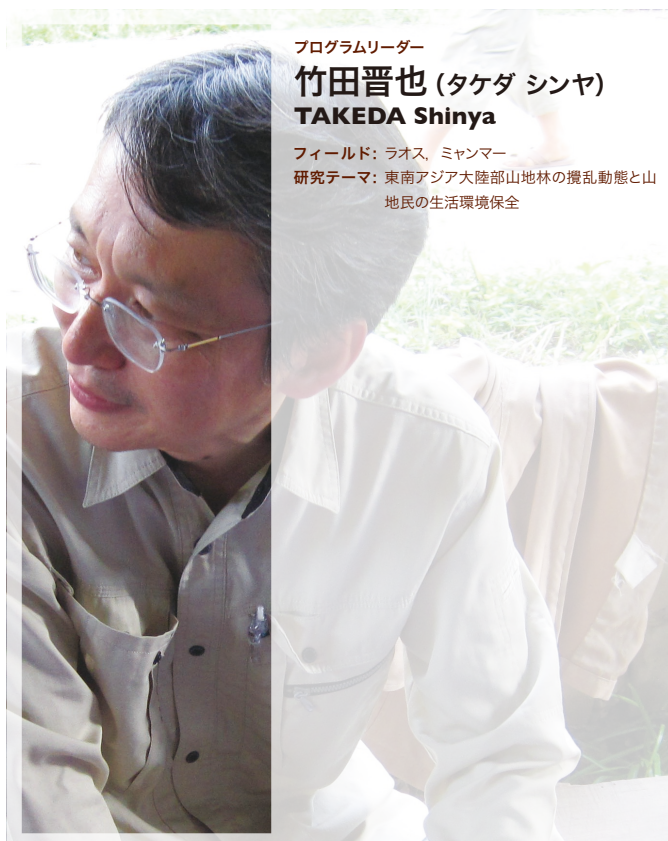
アフリカゾウ



トゲクワ

50 おわりに

はじめに



プログラムリーダー
竹田晋也 (タケダ シンヤ)
TAKEDA Shinya

フィールド: ラオス、ミャンマー
研究テーマ: 東南アジア大陸部山地林の攪乱動態と山地民の生活環境保全

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（以下、ASAFAS）は、2008年10月に「大学院教育改革支援プログラム」（2009年度から「組織的な大学院教育改革支援プログラム」と改称。以下、改革プログラム）に採択され、2011年3月31日まで活動をおこないました。

ASAFASの大学院生の多くは、地域にくらす人びとと長期にわたって生活をともにしながら、調査研究（フィールドワーク）によって得られた知見をもとに文理融合的なアプローチから地域を深く理解することをめざしています。21世紀の地球上には、環境、紛争、難民、食糧、感染症をはじめ、国や地域をこえて共通の問題が顕在化しています。一方、これらの問題は、それぞれの地域に特徴的な生態・歴史・社会・文化的な文脈のうえに生じています。これらの問題の解決策を見いだすには、現場での実践的な活動をおこなうことはもちろん、そのためにグローバルな視点をふまえつつ、さまざまな問題が生じている地域という場やそこに暮らす人びとに寄り添いながら、文理融合的なアプローチを通じて地域を深く理解することが不可欠です。そしてこのことは、アジアやアフリカのどこかの地域でおこっている問題の解決策を探求する活動としてだけでなく、日本に暮らす私たちの多様で豊かな生をつくりだす営為にも通じていると考えます。

私たちは、これまでの教育研究のありかたを再考し、研究と実践的な活動とのあいだを行き来しながら成長していく人材を養成

するという社会的な要請を実感すると同時に、研究と実務を架橋する実践的地域研究の可能性を探りつけてきました。改革プログラムは、その可能性を探るひとつの布石となることを目指し、実務的なマインドをもつ研究者と研究的なマインドをもつ実務者を養成するコースを立ち上げました。養成コースの中核をなすのがフィールドスクールと院生発案共同研究の2つの事業です。

フィールドスクール事業は、アジア・アフリカの7ヶ国（ベトナム、エチオピア、ネパール、インドネシア、カメルーン、タイ、ナミビア）において2009年1月～2010年11月のあいだに各1～2週間、総数70人の院生が参加して実施されました（表紙イラストは、スクール開催国や地域を象徴するような動植物を表現しています）。スクールを開校した地域において活躍されている実務家（国際機関、NGO関係者など）と本研究科ならびに現地提携大学の教員が、フィールド講義やフィールド演習を実施しました。スクールに参加した大学院生は、まず国内における事前研修として、英語によるプレゼンテーション、研究計画書の作成トレーニング、開催国に関する事前講義を受講しました。本報告書には、7つのフィールドスクールの概要のほか、スクール終了直後に書かれた教員や協力スタッフのエッセイ、参加した院生によるフィールドワークやフィールドスクールに関わるエッセイをまとめて掲載しました。

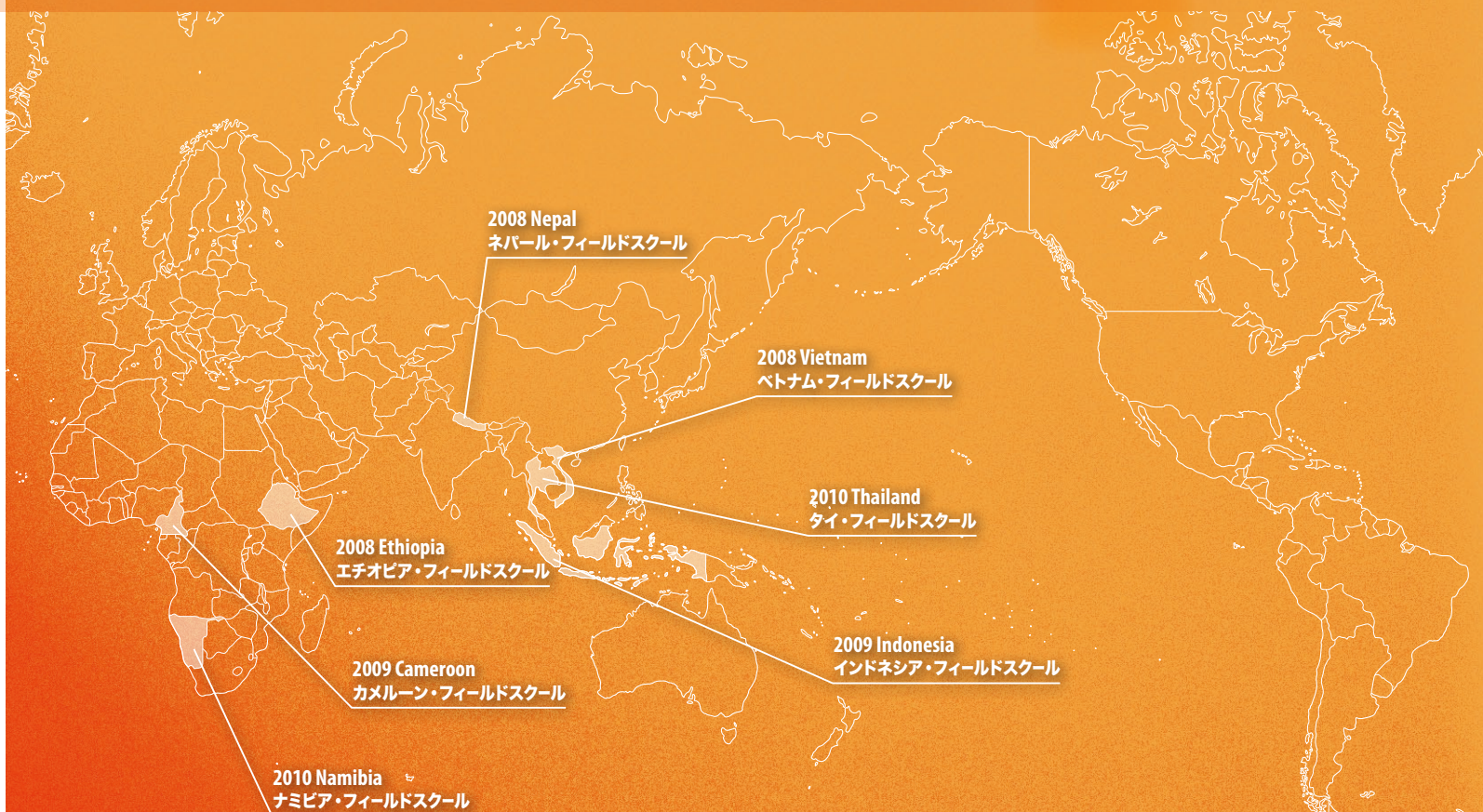
フィールドスクールにくわえて、実践的地域研究の大きな可能性を提示したのは「院生発案共同研究（以下、共同研究）」という事業でした。共同研究では、院生が自発的にグループを組織して、自らテーマを設定して研究会をおこない、それをもとに海外で報告会を企画、開催しました。合計13の共同研究グループが組織され、研究テーマの大半は、現在のアジアやアフリカの諸地域がかかえるさまざまな問題をあつかうものでした（39頁参照）。各グループの院生は、現地での報告会を開催するまでの過程で、さまざまな立場で問題に関わる人びととやりとりをし、研究の成果を特定の地域から、国、さらにはグローバルな潮流のなかで相対化してとらえる経験を重ねていきました。その成果は、海外での報告会にとどまらず、共同研究に加わった院生が中心になって京都で開催したGraduate Student Conferenceと、執筆から編集レイアウトまでを手がけた報告書（全11冊）として結実しました（49頁参照）。

この小冊子をご覧いただいた皆様が、エッセイや報告の内容から、ASAFASによる実践的地域研究教育プログラムの試みとその現状、さらには「地域を深く理解する」ことから広がる地域研究の可能性について理解を深めてくださることを願っています。

プログラムリーダー **竹田晋也**

フィールドスクール

2008年度から2010年度にかけて、
アジア・アフリカアジアとアフリカの計7カ所で合計70人の参加院生を得て、
9～15日間フィールドスクールを開校しました。
同地域で活躍してきた実務家(国際機関、NGO関係者など)と
本研究科(以下ASAFAS)や現地提携大学などの教員が
フィールド講義・フィールド演習をおこないました。
各スクールの参加者と現地での協力スタッフの氏名は
この小冊子の46～48頁にまとめました。



Skill Up

研究発信トレーニング

フィールドスクールを実施前に国内における事前研修として、国際協力のための実務を学ぶ短期集中コースをおこないました。具体的には、外国人研究者や実務家をアドバイザーにむかえて、英語による研究計画書の作成とその講評会や英語によるプレゼンテーションのトレーニングと発表会をおこないました。

院生発案共同研究

院生が自発的にグループを組織して、自らテーマを設定して研究会をおこない、それをもとに海外で報告会を企画、開催しました。研究テーマは、「研究者と開発」「熱帯地域の生態資源と人間活動の動態」「越境するメディア」など現在のアジアやアフリカの諸地域がかかえるさまざまな問題をあつかうものでした。合計13の共同研究グループが組織され、参加院生は37人でした。

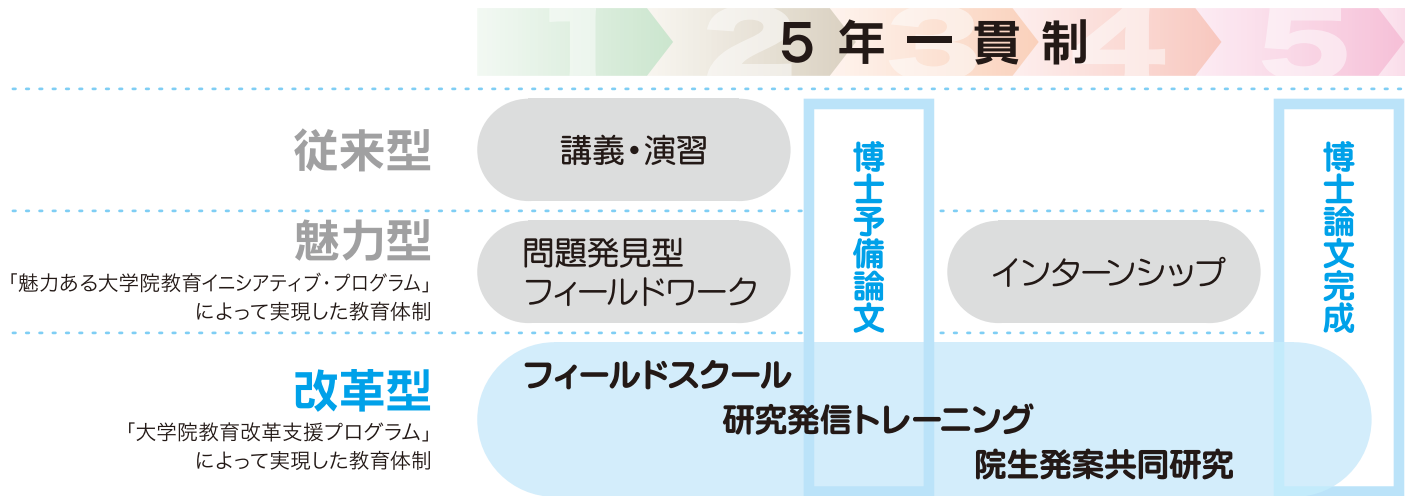
その他の活動

国内外で実践的地域研究者として活躍する
ASAFAS修了生を招いて交流の機会を持ちました。
また、院生発案共同研究事業を経験した学生が中心になり、
海外でおこなった報告会を研究科内で発表する機会をもうけました
(Graduate students conference)。
さらに、このプログラムの支援で実施した院生たちの
海外での調査研究を京大内部に発信する写真展も開催しました。
これらに加えて、エチオピア・フィールドスクールに参加した
エチオピア人学生たちに対して、
京都においてフィールドスクールを開校しました。
このように、プログラムの活動は、研究科内の専攻を超え、
さらには、京都大学学内、そして海外の提携研究機関や
さまざまな機関で働く修了生たちと
より強いネットワークを創りだす活動へと展開していきました。

おわりに

「改革」の愛称で呼ばれた大学院教育改革支援プログラム「研究と実務を架橋する実践的地域研究者の養成」は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）の若手教員が中心になり、研究科の全面的なサポートのもとに実施されました。事業の実施にあたっては、フィールドワーク・インターンシップ支援室の専任スタッフ（特任助教2人、職員1人）が実行委員会メンバーと共に働きました。多くのメンバーは、「改革」に先だって2006年度に採択された「魅力ある大学院教育イニシ

アティブ」プログラムの時代から、新しい教育プログラムの企画立案と実施に取り組んできました。そのなかで、「改革」は、問題発見型フィールドワークや在学中のインターンシップ参加という「魅力」の特徴を引き継ぎながら、更に新たな事業を加えて発展拡大させたものです。これまでになかった教育カリキュラムを導入、確立してASAFASの改革に着手したのは「魅力」であり、それを組織的に発展拡大させたのが「改革」と位置づけることができます。



ASAFASは、文理融合的なアプローチを通じて地域の深い理解をそなえた専門家の育成をめざしています。その目的のもとで「改革」の実施したフィールドスクールでは、フィールドワークに関わる講義や演習の機会を、フィールドワークの現場で提供することにつとめました。ですがそれは、地域の専門家を育成するうえでもっとも重要な「フィールドワーク」という手法をマニュアル化し、パッケージ化して院生へ伝えるものではありません。フィールドスクール実施の意図は、院生が、現場でおこなっている出来事に直面し、その地域に暮らす人びと、調査する研究者、開発実践にたずさわる実務家などさまざまな人びとの多様な声を聞く機会を得ることによって、自らと地域の人びととの関わり方、地域を深く理解するための見方や手法をより深く考えることにありました。各国でのフィールドスクールを担当した担当教員は、多くの工夫をこらしてスクールのプログラムを準備しました。参加した院生がフィールドスクールからなにを感じとり、そして自分のフィールドワークのためになにを考えはじめたか、彼/彼女らのエッセイを読んで汲み取っていただけたこととおもいます。

「改革」の事業は、プログラム終了後も研究発信トレーニングのように、研究科の開講科目として単位化され継続していきます。「魅力」のときに単位科目となった「問題発見型フィールドワーク」と「インターンシップ」も続いています。このような制度面での充実を果たただけでなく、フィールドスクールや院生発案共同研究の事業実施が契機となり、専攻をこえた院生の交流、さ

らには海外のカウンターパート機関との交流へと発展しています。これらの成果は「改革」が終了したあとも、ASAFASのなかで少しずつ花開いていくものと期待しています。

最後になりましたが、この改革プログラムは本当にかぞえきれないほど多くの方のサポートと協力によって実施できました。ここにすべての方々のお名前を記すことはできませんが、プログラム実行委員会を代表して厚く感謝申し上げます。研究発信トレーニングの実施に関しては、ASAFASの外国人客員教員や東南アジア研究所の外国人教員、外国人客員研究員の方々にご協力をいただきました。フィールドスクールでは、各スクール開催地のカウンターパート機関の方々、そこでフィールドワークをされているASAFASのポスドク研究員や院生の方々に全面的な協力をいただきました。また、プログラムのなかで合計6人のリサーチアシスタント（RA）に加わって働いてもらいました。RAの方々の数多くの優れたアイデアや、熱心なはたらきぶりのおかげで、「改革」の各事業に参加した院生が丁寧で実質的な指導をうけることができました。そして、事務部のみなさんには、プログラムの趣旨や内容を理解していただき、円滑に事務手続きをすすめていただきました。事務部のみなさんのご協力なしには、これほどの成果をだすことはできませんでした。本当にありがとうございました。

プログラム副リーダー **重田真義**

書名

研究と実務を架橋するフィールドスクール
社会に貢献するアジア・アフリカ地域専門家の養成コース

ISBN: 978-4-901668-85-9

発行者

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
大学院教育改革支援プログラム

印刷所

株式会社田中プリント

出版年月日

2011年3月30日

編集

竹田晋也, 重田真義, 金子守恵, 落合知子, 小川裕子

イラストレーション

鈴木 遥

制作

朝田 郁



9784901668859

ISBN978-4-901668-85-9

